

# ニュースレター 55

2014. 2. 22

## 経済社会学会 The Society of Economic Sociology

巻頭言 追悼文 第50回全国大会のご案内 第49回全国大会をふりかえって 新理事・新幹事・新監事の紹介 「経済社会学」を教える 自著を語る 部会研究会報告 部会研究会報告要旨 新入会員自己紹介 合同役員会議事録 総会議事録 東部部会役員会議事録 西部役員会議事録 日本経済学会連合評議会報告 2012-3年度決算報告 会員異動

### 巻頭言 新会長挨拶

森田雅憲

私は、学部時代にゼミナールでケインズの『雇用・利子および貨幣の一般理論』を原書で読んだことがきっかけで、経済学に興味をもつようになった。指導教授からは、ケインズ理論のエッセンスは不確実性と貨幣の理論にあると教わった。それゆえ、標準的な経済学のテキスト、とりわけマイクロ経済学のテキストで公理とされている「合理的経済人」には違和感を拭えなかった。大学院に進んでしばらくは、分析ツールを修得する目的もあって新古典派の二部門成長モデルを集中的に研究したものの、ケインズの生き生きとした資本主義経済の描写に比べれば現実味の乏しい論理の塊であり、数学的推論の面白さ以外には興味をもてなかった。それゆえ、博士後期課程に進んでからは、M. カレツキ、J. ロビンソン、N. カルドアら、いわゆるポスト・ケインジアンを経済学に研究の軸足を移した。こうした一家言を有する経済学者の文献はいずれも「作品」と呼ぶべき趣があり、行間に彼らの深い資本主義観が伺え興味は尽きなかった。だが、新古典派経済学のように標準的な研究作法があるわけでもなく、迷宮に迷い込んだような方向喪失感に囚われていた。

そのころ、かつてはマイクロ経済学に限られていた合理的経済人モデルを、マクロ経済学の基礎としても用いるべきだという動向が一気に広まっていった。ミクロ的基礎をもたないマクロ理論は「アドホックだ」と一蹴された。何か自分が時代から取り残されていくような気がしたが、さりとてその流れに乗じる気にもならず、ならばこの機会に合理的経済人を自分なりにきちっと批判しておこうと意を決した。それゆえその後は、浅学菲才を顧みず、科学哲学、進化生物学、理論社会学、言語記号論、複雑系などの文献を手当たり次第に読んでいった。しかしそうした文献を読めば読むほど視界はなおいっそう多岐亡羊となり、このまま研究者として朽ち果てることを半ば覚悟していた。

そのような折、経済社会学会に誘っていただいた。当時、理論関係の学会に加入していたが、大会に参加するたびに違和感とともに会場を後にすることが続いていた。それとは

対照的に経済社会学会では実に多様な報告を聞くことができ、自分の視野狭窄を修正する格好の場であった。そしてこの学会に入会できたことをこのうえない僥倖と思っているのは、それまでケインズの対極にある存在として遠ざけていたハイエクに取り組むきっかけが得られたことである。それまで迷走状態にあった自分の研究が、図らずもハイエクという巨大なジグソーパズルを完成させるためのピースを一つ一つ準備する作業に等しいことが分かったとき、長年の苦労が吹っ飛ぶような思いがした。その意味で、私はこの学会に感謝してもしきれない。そのうえに、このたび会長という身にあり余る要職を担わせていただくことになった。この機会に日頃の感謝の念を少しでもお返しできればと切に願っている。

(同志社大学)

## 角村正博氏 追悼文

松岡憲司

去る 2013 年 10 月 4 日、本学会に長年にわたり貢献されてこられた神戸学院大学の角村正博先生がお亡くなりになりました。まだ 62 歳とこれから一層のご活躍が期待されるお歳で、大変残念なことです。

角村先生は、神戸大学経営学部を卒業後、神戸大学大学院経済学研究科に進まれ、百々和先生の下で学ばれました。大学院修了後、神戸学院大学経済学部で教鞭をとられるようになり、34年間同大学で教育・研究に大変活躍されていました。経済社会学会では、幹事15年そして理事も15年と30年に亘り役員をつとめられ、学会の発展に多大な貢献をされてきました。次期学会長との声もありましたが、体調が思わしくなくお引き受けいただけなかったのは、かえすがえすも残念に思います。体調がすぐれないにもかかわらず6月には、名古屋で開かれた経済社会学会の東西合同役員会に出席されたことには、驚くとともに、角村先生の責任感にあらためて敬意を表する機会となりました。役員以外にも、第39回全国大会「「第3の道」におけるコミュニティの役割「共セクター」の可能性と課題」の座長など全国大会での座長、コーディネーター、報告者、討論者で大活躍されておられ、経済社会学会の顔のひとつであったと申し上げても差し支えないと思います。

個人的なことで恐縮ですが、私は大学院で1年後輩にあたり、角村先生とのお付き合いは、38年に及びます。それぞれ大学に就職した後もさまざまな研究会を通じ、角村先生には多くのことを教えていただきました。夜遅くまで議論していると次第に興奮してくる私たちの中で、角村先生はいつも冷静で、議論をまとめて下さりました。23年前の1990年に角村先生が編者となっていたいただいてまとめた『経済学の方法論と基礎概念』（日本経済評論社刊）は、角村先生の辛抱強さなしには実現しませんでした。特にこの本で角村先生が担当されたカール・ポランニーの経済学については、角村先生らしい重厚で独創的な研究となっております。まもなく出版される経済社会学会編『用語集』では「経済人類学」、「交換」を執筆されています。

経済社会学会にとっては、角村先生を失ったことは大きな痛手ですが、角村先生が安らかに休まれることを願い、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(龍谷大学)

## 経済社会学会第 50 回全国大会のご案内

大会準備委員長 恩田守雄 (流通経済大学)

第 50 回全国大会は、2014 年 9 月 20 日 (土)、21 日 (日) に流通経済大学新松戸キャンパス (千葉県松戸市) にて開催します。大会テーマは下記のとおりです。準共通論題および自由論題の報告者を募集します。募集要項に従ってお申し込みください。

### 1. 大会のテーマについて

「経済学と社会学のコラボレーション(協働)―経済社会学の理論枠組みについて考える」

#### (1) テーマの背景

ここ数年実証的なテーマが続きましたので、理論について取り上げることで経済学と社会学を中心とした学会の原点に立ち返り、混迷深める現状に対して何が言えるのか考えてみたいという意図がテーマ設定の背景にあります。これまで「社会」に関心がある経済学者と「経済」に関心がある社会学者からの知見は経済と社会をめぐる思想として多く議論され、その時代を反映した概念用具も提供されてきました。こうした過去の蓄積を踏まえながら、本大会では経済学と社会学が協働することで現代の諸問題を解決し、そのための理論枠組み (フレームワーク) について改めて考える機会にしたいと考えています。

#### (2) テーマの趣旨

かつてインター・ディシプリナリー(inter-disciplinary)という言葉が言われ、個別専門分化したディシプリン(discipline)に対して社会諸科学の学際 (境界領域) 的なアプローチの必要性が強調されました。またトランス・ディシプリナリー(trans-disciplinary)という固有のディシプリンを横断的に再編する言葉があり、社会科学共通の理論枠組みを創成する時期もありました。1960 年代からのシステム論の隆盛は学融合の一つの表われとして広く経済学と社会学にまたがる共通の理論枠組みの役割を果たしました。しかしその後再び個別細分化する方向が散見されるようになり、その一方で新たな共通の理論枠組みも台頭しています。そこで本大会では経済学と社会学固有のアプローチの違いから両学問協働の可能性について考えるとともに、広く社会諸科学にまたがる汎用性の高い新たな理論が両学問においてどのように応用されているのか、ゲーム理論とネットワーク論について報告者の発表から考えてみたいと思います。また今なお部分と全体を考えるととき有効な理論として機能し汎用性を失っていないように見えるシステム論 (社会システム、経済システム) についても、言わば新旧理論の対照あるいは対峙という点から取り上げます。こ

れら三つの理論に精通している報告者の発表とそれに対する討論を経済学と社会学双方の立場から展開してもらい、「経済社会学の理論」について検討する大会にしたいと考えています。

## 2. 大会の記念企画と運営について

### (1) 第50回大会の記念企画

本学会は2014年に50年という節目を迎えます。この機会に学会のこれまでの歩みを振り返ることは意義あることと思われまふ。その一方で本学会の成立のいきさつを知る会員も少なくなりました。そこで長く学会に在籍し発足時の経緯をよくご存じの諸先生に学会成立当時のことを語っていただき、またこれまでの学会の歩みを振り返り、今後の学会発展に向けてのメッセージをいただく場としてパネルディスカッション「経済社会学学会50年を振り返る—学会のさらなる発展に向けて—」を企画しました。この座談会が本学会の歴史を再確認あるいは改めて知る機会となり、今後のあり方などフロアーの会員との意見交換を通してさらに学会が発展していくことが期待されます。

なお他の学会でも節目の年に様々な企画がされていますが、その多くは論文集の刊行などです。たまたま出版企画として発刊が遅れたこともありますが、『経済社会学キーワード集』がこの節目の年に刊行される予定です。これを一つの記念事業として捉えても、会員諸兄からの賛同が得られるものと思われまふ。

### (2) 大会運営のコンセプト

本大会は「コンパクト&スマート」を運営のコンセプトとして掲げ、無理のない無駄のない環境に優しい大会運営を心がけたいと考えています。

## 3. 準共通論題および自由論題の報告について (募集要項)

### (1) 報告の申し込み、締め切り、結果の通知

#### ①申し込み

eメールのタイトルを「経済社会学学会報告申込(氏名)」として、氏名、所属、eメールアドレス、連絡先住所、電話番号(可能なら携帯電話番号)を示し、「報告の概要」(600字程度、目的・方法・考察・結論を明示した内容)を添付してお申し込みください。

#### ②締め切り 4月30日(水)

#### ③結果の通知と採択の基準

報告希望の採択決定は提出された「報告の概要」をプログラム委員会が検討のうえ、東西合同役員会開催後6月上旬に連絡します。採否の判断基準は以下の通りです。

- ・テーマ設定が明確であること・設定されたテーマが経済社会学に関連するものであること
- ・学術的研究に基づく発表であること・主要な論点あるいは結論が明確に示されていること

なお、今年度(2013年9月~2014年8月)までの会費を完納していることが報告の前

提条件となります。報告日時および座長・予定討論者は6月下旬にお知らせします。

(2) 報告要旨集の原稿

採択された方は6月30日(月)までに、以下の書式に従いeメールにて大会当日配付用要旨集の原稿を提出してください。

A4版4ページ以内(図表含む)、Word文書、フォントMS明朝10.5ポイント、改行幅1行、ページ番号なし、余白上下左右30mm、論題1ページ上段中央、氏名(所属)は次の行右端

(3) 発表原稿の提出

発表原稿(フルペーパー)は8月31日(日)までに、座長・討論者・大会準備委員長にそれぞれご送付ください。分量と様式は自由です。

(4) 問い合わせ、eメールの宛先アドレス

流通経済大学新松戸キャンパス 社会学部社会学科 恩田守雄

〒270-8555 千葉県松戸市新松戸3-2-1

TEL: 047-340-0001 FAX: 047-340-0020 e-mail:onda@rku.ac.jp

## 経済社会学会第49回全国大会をふりかえって

豊山宗洋(大阪商業大学)

第49回全国大会は、大阪商業大学を会場として、2013年9月21日(土)~22日(日)に開催されました。大会テーマは「地域コミュニティにおける新しいネットワークの可能性」で、大会参加者は95名でした。地域コミュニティの形成や再生が現代の経済社会における大きな政策課題となっていること、本学の位置する東大阪市がモノづくりのまちとして発展してきたことを踏まえパネルディスカッション企画として「東大阪のまちづくりにおける企業・行政・教育機関の役割—住工共生問題への対処を起点としたネットワークの広がり—」を開催しました。高井田まちづくり協議会、東大阪市経済部モノづくり支援室、(前)大阪府立布施高等学校からパネラーとして参加いただき、モノづくりに関するさまざまな課題や施策、そして相互のつながりについて熱く語っていただきました。

共通論題においては大会テーマのもとで、松岡憲司先生からは京都の伝統産業集積、大野正英先生からは社会システム、宮垣元先生からはNPOとの相互作用という観点から地域コミュニティについて論じていただきました。そのほかに準共通論題6報告、自由論題16報告もおこなわれました。

準備の段階から森田雅憲先生、上沼正明先生、永合位行先生、鈴木先生には、とくにお世話になりました。報告者や討論者の決定につきましては、役員の先生方を始めとして会員の先生方から多くのご支援をいただきました。パンフレットの印刷や会場の設営、あるいは懇親会場やお弁当の手配に関しましても、さまざまな方に尽力いただきました。さら

に大会当日の会場受付、会場の後片付けなどにおいて、大阪商業大学の学生諸君には多くの協力をいただきました。おかげさまで大会を無事終えることができました。ありがとうございました。

## 新理事・新監事・新幹事の紹介

役員（2013年9月～2016年8月）

会長 森田雅憲（同志社大学）

理事 ＊は常務理事

（東部）

宇佐見義尚（亜細亜大学）

大野正英＊（麗澤大学）大会/ニューズレター

織田輝哉＊（慶應義塾大学）部会研究会

恩田守雄（流通経済大学）出版企画/大会

上沼正明＊（早稲田大学）総務/事務局

佐々木實雄（日本大学）

田中人（亜細亜大学）

田村正勝（早稲田大学）

橋本努（北海道大学）合同研究会

間々田孝夫＊（立教大学）経済学会連合

水原俊博（信州大学）＊ 年報

渡辺深（上智大学）経済学会連合

（西部）

足立正樹＊

伊東真理子（同朋大学）合同研究会

小林甲一＊（名古屋学院大学）合同研究会

小林大造（姫路獨協大学）ニューズレター

鈴木純＊（神戸大学）事務局/会計

永合位行＊（神戸大学）総務

橋本昭一＊（元関西大学）

福田亘（岡山商科大学）年報

藤岡秀英（神戸大学）部会研究会

宮垣元（甲南大学）部会研究会

若林直樹（京都大学）

監事（東部）唐澤和義（元杏林大学）

（西部）大西秀典（尾道市立大学）

幹事

（東部）

石田幸生（杏林大学）年報

石田光規（大妻女子大学）ニューズレター

鈴木康治（早稲田大学）事務局/部会研究会

鄭舜玉（埼玉女子短期大学）

総務/ニューズレター

（西部）

小島秀信（愛知江南短期大学）

部会研究会

佐々木亘（鹿児島純心女子短期大学）

事務局

張帆（京都華頂大学）部会研究会

豊山宗洋（大阪商業大学）

ニューズレター

寺島拓幸（文京学院大学）年報/部会研究会  
中里裕美（明治大学）年報/合同研究会  
中島裕明（早稲田大学）渉外/出版企画  
廣瀬毅士（立教大学）年報/事務局

平田謙輔（京都学園大学）大会  
松岡憲司（龍谷大学）年報  
村上寿来（名古屋学院大学）  
事務局/合同研究会  
森周子（佐賀大学）大会

## 「経済社会学」を教える

田中 人

随分前のことになるが、縁あって立教大学社会学部産業関係学科にて「経済社会学」の講座を担当する機会を得たことがある（その後の改組により同講座は現在ない）。短い期間ではあったが、大教室を埋める熱心な受講生に囲まれて過ごした経験は、現在担当する他の多くの講義の土台となった。

とはいえ経済社会学を教えるということは、いざシラバスを準備し、いよいよ実際に教壇に立つとなるとなかなか厄介な仕事であった。そもそも経済社会学は、それ固有の学問体系としての収斂や洗練を持つものとは言い難く、むしろ日々多方面へと越境・拡散する変化の激しい分野である。しかしながら逆に言えば、「経済社会学を教える」ということの意義は、その際限なき学際性と総合性の持つダイナミズムと今日的アクチュアリティにこそあるのだと考え直し（つまりは開き直り）、講義では、ほかならぬ自分自身の「経済社会学」を展開しながら学生の学問的視野を鍛えることに主眼を置いた。

当時、私にとっての経済社会学は、基本的に経済学と社会学を中心とした社会科学の総合をテーマとするものであった。も

とより社会諸科学は自由を求める経済と秩序を求める社会との間のバランスを考える学問であり、とりわけ経済社会学は、この問題に真っ向から立ち向かう学問分野にはほかならない。それは経済学と社会学のあいだを横断することで、人間の経済行為の背後にある無数の非経済的な変数を明らかにするものである。その意味では経済社会学の視点とは、初期の経済学者や社会学者が自明のこととしていた視点、すなわち経済学が近代市民社会の存在論であり、社会学が経済時代における人間結合の原理の模索であった頃の学問的始原の視点に立ち返ることにほかならない。その意味で、私にとって「経済社会学を教える」ということは、いわば社会諸科学の「根拠への帰還」を通じて今日の社会的諸問題の克服へ向けたトータルな視野と方法論を、学生と共に構想する作業のことだったのである。

具体的な講義の中身までを記す紙幅はないが、大まかには私たちの社会が経済社会と呼ばれるようになった所以から解きほぐし、スミスの議論（道徳哲学）から社会契約説を経てヘーゲルやマルクス、デュルケームやウェーバーを論じて講義の前半部を終え、しかる後に 21 世紀の現代社会が抱える経済、社会、文化の様々な変容と課題を特にグローバル化の観点から論じたように思う。今からすれば若気の至りで詰め込み

すぎの授業を展開していたわけであるが、今日の専門分化した学問が、現象の詳細な説明はできても、その背後にあるトータルな人間的、社会的意味の把握を不得手とするのではないかという青臭い議論に多くの学生が共感を示してくれたことが、ある種のほろ苦さとともに懐かしく思い出される。  
(亜細亜大学)



## 自著を語る

『社会政策のための経済社会学』  
高菅出版 (2012)

藤岡 秀英

「社会政策と経済社会学」は、学問的どのような関係にあるのか。私は、どちらも「経済社会体制の構造と力学、その本質」を考えることが課題だと思います。しかし、今の社会政策論は、社会保障と労働政策のすべての領域を対象としながらも、それぞれの研究は個別の制度やテーマに分かれて進められ、経済社会全体の構造や力学を扱う体制論的な研究はほとんどありません。

たしかに、年金、医療、介護など社会保険の財政問題、少子化対策の必要性、生活保護と就労促進策との関係など、実践的な課題が山積するなかで、それぞれのテーマについての実証的研究も重要です。しかし、様々な「社会問題」と実践的課題を、個別に研究する努力と同時に、今日の経済社会の変動をもたらしている原理的な問題を明らかにする必要があると思います。経済社会学は、経済現象と社会現象を全体とし

て理解するため、経済社会現象の本質を探究する学問だと思います。ですから、私は、「社会政策論を経済社会学のひとつの領域として考えている」のです。

そして、「自由と倫理」の問題は、経済社会学を考える上で避けられない基本的なテーマです。第3章では、今日の経済学的前提とされている「功利主義」が、J. ベンサムや J. S. ミルのオリジナルの議論からかい離しており、その道徳的基礎が見失われているという問題を明らかにしています。Utilitarianismを含めて、経済社会の議論には道徳的な制約を外してはならないのです。

さらに、ボランティア、NPOによる活動が躍進し、新しいコミュニティづくりへの試行錯誤が展開される中、イジメ問題やうつ病など、他者との人間関係に苦慮する時代になりました。第8章では蔵内数太の「現象学的社会学」にもとづく「社会本質論」と社会変動について議論しています。「社会とは『視界の相互性』にもとづく体験事実である」という定義をふまえることが、新しいコミュニティづくりにとって大切な知見に結びつくと考えています。

(神戸大学)



## 部会研究会報告

### 東部部会研究会報告

日時：2013年12月4日（土）13:00～15:00  
場所：早稲田大学早稲田キャンパス14号館10階1054室

参加者：15名

第1報告：畑山要介（早稲田大学）

論題：「社会的経済」と「倫理の市場」の分岐点—K. ポランニーと F. ハイエクの社会観の比較を通じて—

第2報告：廣瀬毅士（立教大学）

論題：「共生意識・国民意識と生活行動—政治的ナショナリズムとエコノミック・ナショナリズム—」

（大野正英）

### 西部部会研究会報告

日時：2013年11月30日（土）15:00～16:30  
場所：神戸大学 六甲台キャンパス 本館 212教室

参加者：17名

報告：山本慎平（大阪市立大学大学院後期博士課程）

論題：「新渡戸稲造における人格主義とソシアリテ

イー」

討論者：森田健司（大阪学院大学）

（宮垣 元）

## 部会研究会報告要旨

### 東部部会研究会報告要旨

「社会的経済」と「倫理の市場」の分岐点—K. ポランニーと F. ハイエクの社会観の比較を通じて

畑山要介

倫理的経済のあり方をめぐる構想は、大きく2つの枠組みに区別されるように思われる。ひとつは、協同組合の組織化を通じて市場経済を制御しようとする「社会的経済」の枠組みである。もうひとつは、認証制度を通じて倫理的配慮それ自体を市場経済に内部化しようとする「倫理の市場」の枠組みである。前者は、自由な経済行為を制限することを通じて、後者は自由な経済行為そのものを通じて、それぞれ倫理的な生産・取引・消費を生み出す枠組みである。両者はともに倫理的経済の維持・形成の枠組みであるにもかかわらず、近年においては「協同組合か、それとも認証制度か？」という問題化によって齟齬やコンフリクトが生じつつある。そこで本報告では、K. ポランニーと F. ハイエクの社会観の相違を補助線としながら、この「社会的経済」と「倫理の市場」の分岐点がどこにあるのかを検討した。

報告では、ポランニーとハイエクの理論を「他者理解の理論」として再構成することによって、その相違を浮き彫りにすることを試みた。これによって「他者の内面を見通す」ということが、ポランニーにおいては「同一性」の問題として、ハイエクにおいては「差異の架橋」の問題として措定さ

れていることが明らかとなった。この分岐点が両者の社会観の相違、すなわちポランニーが行為の成立図式を社会の成立図式に投影する一方でハイエクは行為の成立図式と社会の成立図式を切り離すという相違を生み出している。ポランニーの視座からすれば倫理的経済は諸個人の自覚的行為の集積であり、ハイエクの視座からすればそれは諸個人の自由な経済行為の意図せざる結果であると言える。

社会的経済と倫理の市場の間の相違が内面的見通しをめぐる仮説を分岐点としてとすれば、協同組合と認証制度はそれぞれの視座から構想される行為調整機能であると言える。したがって「協同組合か、それとも認証制度か？」という問題は、きわめて社会科学方法論的水準の問題を含んでいると理解されなければならない。  
(早稲田大学)

### 共生意識・国民意識と生活行動 —政治的ナショナリズムとエコノ ミック・ナショナリズム—

廣瀬毅士

かつて、グローバル化した経済社会においては国民国家の役割や主権範囲がナショナリズムが衰退していくという予想がなされていた。しかし近年の現実社会はナショナリズムの噴出に直面しており、日本においても近隣諸国との間の利害対立に相まって、それら近隣諸国やそれらの国を出身とする人々・製品に対する悪感情といった排外的ナショナリズム意識が一部で高まっているとの議論がある。

本報告は、東京都心部における無作為標本に対する質問紙調査データを用いて、純

化主義および排外的ナショナリズム意識、ナショナル・プライド、さらには市民レベルにおけるエコノミック・ナショナリズム意識の測定を試みた速報的な研究結果の提示である。質問項目作成にあたってはISSP (International Social Survey Program) など先行研究を参考にし、複数の項目から尺度構成をして分析を行った。

データが示すところでは、純化主義的ナショナリズムが強いほど排外的であり、また移民受入れの政策に対しても否定的であった。さらに、排外的意識の対象については日本にとっての近隣諸国の人々に対するものが上位であり、この点が先行研究とは異なっている。その一方でナショナル・プライドの意識は、純化主義および排外主義ナショナリズムに直接的な影響を及ぼすものではないことを指摘した。

最後に、いくつかの製品・産品の産地から市民レベルのエコノミック・ナショナリズム意識を考えてみたが、排外主義およびナショナル・プライドとの関連が強く、また中国産品・製品への憂慮といった所謂「チャイナ・リスク」意識との関連が強いことを報告した。

(立教大学・社会情報教育研究センター)

## 西部部会研究会報告要旨

新渡戸稲造における人格主義とソシアリティー

山本慎平

明治の終わりから大正の初めにかけて、新渡戸稲造 (1862年—1933年) は旧制第一高等学校の校長を務めるとともに、

『修養』(1911年)や『世渡りの道』(1912年)といった一般向け修養書によって大衆の啓蒙を行った。これまで一般書における修養論については多くの研究がなされてきたが、一高における新渡戸の修養論や教育論については、まとまった資料がなく、十分な研究がなされてきたとはいえない。本報告では、一高における新渡戸の修養論を一高の『校友会雑誌』をもとに見ていき、それを大衆書における修養論と比較し、新渡戸の指導者像、指導者教育観について明らかにすることを試みた。

第一に、『修養』や『世渡りの道』をもとに新渡戸の修養論における人格主義とソシアリティーについて検討した。ここで新渡戸は、人格の観念やソシアリティーといった西洋的な概念を廉恥心や礼といった日本の伝統的な用語を用いて説いた。次に、第一高等学校における演説や挨拶などから、新渡戸の発言を自治論、具体的修養論、ソシアリティー論、教育論のテーマごとに考察した。

一高における発言と一般書における修養論を比較すると、新渡戸はその両方で人格とソシアリティーを説いたことがわかる。ただしその解き方には異なる側面もあった。例えば、新渡戸は一般書においてはキリスト教の例や武士道の用語を使いながらそれを説いたが、一高での挨拶においてはそれをせず、ジェントルマンシップやカントの定言命法などを持ちだした。これは状況に応じて説き方を変えろという新渡戸の特徴であるとともに、新渡戸の宗教観の合理性も示しているといえる。また新渡戸は、一高においては狭義(自治寮内)のソシアリティーを説いた。新渡戸が狭義のソシアリティーを説いて自治寮を積極

的に評価したのは、自治寮での生活を通して、一高生が日本の国内外で自治を担い、その発展を指導する人物になることを期待したからであったといえる。

(大阪市立大学・大学院)

## 新入会員自己紹介

### 【朝倉登】

学生時代に卒業論文でM・ウェーバーの経済社会学を取り組みましたが、日本語訳がその当時なく、また関連論文も少なかったため、断念しました。定年退職後、時間の余裕が持てるようになり、大学院に社会人入学しました。

研究対象としては、M・ウェーバー『経済と社会』論文集(「経済行為の社会学的基礎範疇」、「経済と社会集団」、「都市の諸類型」)や「一般社会経済史要論」等を使って、西洋中世経済史の研究をしたいと思います。

このほか、M・ウェーバーの社会科学方法論(理念型)にも関心があります。ところで、最近ではウェーバー研究者が少なくなつたと聞いていますが、よろしくお願ひします。(名古屋学院大学・大学院)

### 【山本慎平】

現在私は戦前期の思想家・教育家である新渡戸稲造の社会思想について研究しています。主に三つの点について関心を持っています。一つ目は大正時代における新渡戸のデモクラシー論についてです。人格観念の育成を重視した新渡戸のデモクラシー論を吉野作造の民本主義と比較しつつ、大正デモクラシーとその後の総動員体制

成立の文脈で再評価する試みです。二つ目は晩年の新渡戸の自由主義論や国家論についてです。特に、新渡戸の説いた寛容としての自由主義の意義と限界を満州事変以後の新渡戸の言動などを含めながら考察しています。最後の関心は、旧制第一高等学校校長時代の新渡戸の修養・作法論、教育論です。新渡戸の修養論や作法論について当時の一高の籠城主義や後の教養主義と比較しつつ、加えて同時期に新渡戸が行っていた大衆啓蒙における修養論と比較しながら、新渡戸の理想とした指導者像を明らかにしたいと思っています。

(大阪市立大学・大学院)

## 東西合同役員会議事録

日時：2013年9月20日

会場：大阪商業大学 4号館 459教室

司会：永合理事

議題：

### 1. 役員選挙結果報告および新役員体制

水原選挙管理委員長より、選挙結果が報告された。引きつづき、東部新役員について上沼理事から、西部新役員について永合理事からそれぞれ紹介され、承認された。また、橋本理事より新会長として森田理事が推薦され、協議の結果、森田新会長の就任が承認された。

### 2. 学会現況報告

森田会長より、会員数、会費納入率等の現況が報告された。

### 3. 新入会員承認

鈴木理事より7名の新入会員が紹介され、承認された。

### 4. 2012-2013年度決算

鈴木理事より決算案の説明が行われた。

### 5. 監査報告および決算案の承認

内山監事による監査報告が大西理事により代読された。続いて決算案について協議の結果、承認された。

### 6. 2013-2014年度予算

鈴木理事より予算案について説明され、協議の結果、承認された。

### 7. 会務報告

・部会研究会開催状況について、東部は宇佐見理事から、西部は小林大造理事からそれぞれ報告された。

・学会年報35号の編集経緯について、織田理事の報告が上沼理事により代読された。

・学会賞選考委員の選出について、上沼理事より報告された。委員長には前会長である佐々木実雄理事が就任し、委員長による選定にもとづいて前体制より半数が交替することが確認された。

・ニューズレター53号、54号の編集・発行状況について、渡辺理事より報告された。

・日本経済学会連合について、間々田理事より、平成25年度第1回評議員会の議題内容(ニューズレター54号記載)が報告された。

### 8. キーワード集

恩田理事より編集状況について説明があり、2014年度中に刊行予定であることが報告された。

### 9. 次年度大会

恩田理事より、以下の計画が提案され承認された。

#### 第50回全国大会

開催校：流通経済大学新松戸キャンパス

日時：2014年9月20・21日

大会テーマ：経済学と社会学のコラボレーション

これに関連して、宇佐見理事より、「第50回記念」としてのプログラム(イベント)を企画

## 総会議事録

できないかとの要望があった。

### 10. 学会賞

足立選考委員会委員長の代理として永合理事より、選考委員会による審査の結果、今年度は該当なしとの結論になったことが報告された。

### 11. 新公益法人法への対応

上沼理事より、当学会としての対応に関する検討状況について説明があり、当面は任意団体として運営することが提案され、これを承認した。

### 12. 情報公開について

上沼理事より、国会図書館による当学会ニューズレターの情報収集と公開について説明があり、執筆者の了解をとって公開を認めることが承認された。また、学会名鑑データベースに対して当学会の新役員体制について回答することが報告された。

### 13. シニア会員制度

鈴木理事より、シニア会員資格の要件について、「一般会員として在籍（会費納入）5年以上」の部分で「会員として在籍（会費納入）5年以上」に修正する提案があり、承認された。また、2名のシニア会員資格変更希望者が紹介され、承認された。

### 14. 会費長期未納者の会員資格喪失

鈴木理事より、4年度分以上の会費未納者が報告され、これらの会員について、会則により会員資格を失うことが報告された。また、鈴木理事より、長期未納により会員資格を失った者が学会に復帰する際の条件（現在は4年度分の会費を納入することを要件としている）について、条件を緩和する提案があり、継続審議となった。

（鈴木純）

日時：2013年9月22日

会場：大阪商業大学 蒼天ホール

議長：永合理事

議題：

#### 1. 役員選挙結果報告および新役員体制

水原選挙管理委員長より、選挙結果が報告された。永合理事より、新役員体制の紹介があり、東西合同役員会において新会長に森田理事が選出されたことが報告され、承認された。引き続き、森田新会長からの就任挨拶があった。

#### 2. 学会現況報告

森田会長より、会員数、会費納入率等の現況が報告された。

#### 3. 新入会員承認

鈴木理事より7名の新入会員が紹介され、承認された。

#### 4. 2012-2013年度決算

鈴木理事より決算案の説明が行われた。

#### 5. 監査報告および決算案の承認

内山監事による監査報告が大西理事により代読された。続いて決算案について協議の結果、承認された。

#### 6. 2013-2014年度予算

鈴木理事より予算案について説明され、協議の結果、承認された。

#### 7. 会務報告

・部会研究会開催状況について、東部は宇佐見理事から、西部は小林大造理事からそれぞれ報告された。

・学会年報35号の編集経緯について、織田理事の報告が上沼理事により代読された。

・ニューズレター53号、54号の編集・発行状況について、渡辺理事より報告された。

・日本経済学会連合について、間々田理事より、平成25年度第1回評議員会の議題内容(ニューズレター54号記載)が報告された。

#### 8. キーワード集

恩田理事より編集状況について説明があり、2014年度中に刊行予定であることが報告された。

#### 9. 次年度大会

恩田理事より、以下の計画が提案され、承認された。

##### 第50回全国大会

開催校：流通経済大学新松戸キャンパス

日時：2014年9月20・21日

大会テーマ：経済学と社会学のコラボレーション

#### 10. 学会賞

足立選考委員会委員長より、選考委員会による審査の結果、今年度は該当なしとの結論になったことが報告された。

#### 11. 新公益法人法への対応

上沼理事より、当学会としての対応に関する検討状況について説明があり、当面は任意団体として運営することが提案され、これを承認した。

#### 12. 情報公開について

上沼理事より、国会図書館による当学会ニューズレターの情報収集と公開について説明があり、執筆者の了解をとって公開を認めることが承認された。また、学会名鑑データベースに対して当学会の新役員体制について回答することが報告された。

#### 13. シニア会員制度

鈴木理事より、シニア会員資格の要件について、「一般会員として在籍(会費納入)5年以上」の部分で「会員として在籍(会費納入)5年以上」に修正する提案があり、承認された。また、2名のシニア会員資格変更希望者が紹介

され、承認された。

(鈴木純)

## 東部部会役員会議事録

日時：2013年12月14日(土)15:10~16:30

早稲田大学社会科学部14号館1054号室

議題：

#### 1. 新入会員の承認の件

今回は、申込み者なし。

上沼理事より、推薦依頼と、申込み書様式、入会者は学会デビューとして東部研究会で発表する慣例、についての確認があった。

#### 2. 第50回全国大会の件

恩田理事より、大会プログラム委員会作成の配布資料に基づき、大会テーマ、第50回大会記念企画と運営コンセプト、大会スケジュール、について提案と説明があった。協議の結果、提案を了承するが、大会テーマの副題を「経済社会学の理論枠組みについて考える」に修正すること、共通論題の報告者と予定討論者を両分野がバランスよくなるようプロコミに再検討を依頼することになった。

#### 3. 日本学術会議の「経済学参照基準」への対応の件

上沼理事より、本件に関する経緯説明が、日本学術会議ホームページの該当箇所を確認と、他学会からの呼び掛け文書と先月末の西部役員会での協議結果報告メールにつき詳細にあり、協議を行なった結果、以下の意見があった。

・基準案は、表現上幾つか問題があるが、全体としては良いと思う。

・日本学術会議から検討依頼があったのか。

・学会として明確な態度をとることが良いのか疑問である。経済学と社会学の研究分野の

会員からなる本学会が、そもそも明確な方針が出せるのか。社会学参照基準についてどう対応するのか。

・基準案の中心は、近代経済学であり、その他を配慮しているけれど、それは中途半端に留まっている。

・影響が大きいマル経が学会として、どのように対応するのだろうか。

・大学教育と経済学教育を混同しているのではないか。研究者の視点ではなく、大学教育ならば、キャリア教育を中心に置くべきである。

・大学教育の質保証というのが名目らしいが、そもそも質保証という問題の所在はどこにあるのか。

・ガイドラインに過ぎないというが、一度できれば基準が一人歩きして、カリキュラム等に大きな力を持つことになる。

・ミクロ＝マクロは基本ではあるが、教育としては深み、厚味に欠ける。

・社会学の研究者として、経済学者のなかでかくも意見の相違があることを知り、驚いている。

なお、今後、日本学術会議より意見表明を求められたなら、役員会で出た意見をそのまま列挙して表明するのが良いとの意見の一致をみた。

#### 4. 会務報告

・「年報」水原理事より、次号(36号)の編集状況について別紙の通り報告があった。なお、高田保馬賞選考委員会の規定案については、内規等を精査して次回役員会に諮り、6月合同役員会に提案することになった。

・「ニューズレター」大野理事より、西部側が次号の編集を担当し、3月初旬に刊行予定であるとの報告があった。なお、レイアウトの改善意見、原稿執筆の際の国会図書館と学会

ホームページでの公開同意について確認があった。

・「日本経済学会連合」間々田理事より、前回10月26日の評議員会の内容と、経費削減のため事務局の一部移転について報告があった。

・「キーワード集」恩田理事より、膨大な執筆者数と項目のため初校の出が遅れているが、刊行時期は予定通り進めたいので協力をお願いしたいとの報告があった。

・「部会」織田理事より、次回定例研究会を5月10日(土)に開催するため報告者予定リストを作り準備を始めたとの報告があった。なお、6月7日(土)に名古屋学院大学栄サテライト(予定)にて合同役員会・研究会を東部当番で行うので、研究報告者の人選を進めることになった。

・「事務局」上沼理事より、日本経済学会連合から英文年報執筆の依頼があり執筆者の人選を進めたいとの発言があった。なお、東部会員メーリングリストのメルアド不明者リストが示され、一部判明した。

#### 5. その他

特になし。 (上沼正明)

## 西部役員会議事録

日時：2013年11月30日

会場：神戸大学

議題：

1. 学術会議「経済学参照基準」について  
「参照基準」への対応について協議した。

出席者からは賛否両論が出された。

参照基準を擁護する意見としては、

(1)アプローチの多様性の尊重、制度論や思想史の必要性等も指摘しており、過剰な対応

をする必要はない。

(2) 経済学教育のなんらかのコアは必要であり、それがマクロ経済学・ミクロ経済学に置かれていることは問題ではない。

(3) 以前の素案に比べ、反対派の意見もとりいれ、全体としてトーンダウンした形になっていきているので、細かな文言の問題はあるが、全体として否定すべきものではない。などの意見が出された。

一方、参照基準を批判する意見としては、

(1) おだやかな表現になってきているものの、やはり経済学の基本は標準的アプローチとされており、ますますにはないにしろ、将来的に標準的アプローチからはずれる領域が排除されていく危険性が危惧される。

(2) 参照基準の経済学の定義は、あまりにも視野の狭いものであり、まったく受け入れられない。

(3) 経済学教育にコアが必要であるなら、ミクロ・マクロよりも、経済学説史なのではないか。

などの意見が出された。

こうした賛否以外の意見としては、

(1) 学術会議の方から学会としての意見を求められているわけではなく、また西部役員の間で反対意見が多数というわけではないので、反対表明のような対応をとる必要はないし、またなんらかの形で署名を求める必要もない。

(2) 社会学分野でも参照基準の作成が行われている。経済社会学会は、社会学分野での参照基準に意見を言うべきなのか、経済学分野での参照基準で意見を言うべきなのか。などの意見があった。

以上のような意見を受けて協議し、西部役員会としては、「役員の間で意見が割れていることから、本件につき学会ないし役員会とし

て具体的な対応をとることはできない」という結論となった。なお、東部役員会での議論の結果、西部役員会と異なる結論が出てきた場合には、あらためて検討することとした。

## 2. 第50回全国大会プログラムについて

鈴木理事より、プログラム委員会により作成された大会テーマおよび共通論題セッション等について現段階の計画が説明され、了承された。

(鈴木純)

## 日本経済学会連合報告

日本経済学会連合平成25年度第2回評議員会が、平成25年10月28日(月)午後6時から早稲田大学にて開催された。本学会からは間々田常務理事が出席した。

### I 報告事項

1. 英文年報第33号の編集作業は順調に進行している。2. 第2次国際会議派遣補助は日本保険学会に決定(25万円)。3. 第2次外国人学者招聘滞日補助は経済理論学会に決定(10万円)。4. 第2次学会会合費補助は日本財政学会に決定(5万円)。5. 会計中間報告。6. その他。

### II 協議事項

1. 次回理事選出選挙の説明がなされた。2. 理事および監事選出内規の微修正を決定。3. 例年通り『英文年報』、『連合ニュース』の発行や学会補助を行なうことを決定。ただし、『連合ニュース』はWeb版に移行して経費を節約する。4. その他として、平成26年3月の事務局移転を機に、IBI(国際ビジネス研究センター)に学会業務委託する旨提案があった。(間々田孝夫)



経済社会学会 「2012.9-2013.8年度」決算  
 (自2012年8月23日 至2013年8月31日)

収 入		支 出	
前年度繰越金	3,083,628	第48回大会支出	
第48回大会参加費	285,000	印刷費	150,340
納入会費	1,917,000	通信連絡費	58,427
補助金・寄付等	150,000	大会運営費	191,322
雑収入	81	小計	400,089
		本部事務局支出	
		学会賞費	-
		会長通信費	10,000
		ニューズレター刊行費(53, 54)	78,120
		ニューズレター編集費	19,744
		学会連合分担金	35,000
		通信連絡費・諸雑費	263,207
		役員選挙費	35,510
		名簿刊行費	54,120
		小計	495,701
		部会経費	
		東部部会経費	7,201
		西部部会経費	24,781
		小計	31,982
		年報関係費	
		第35号編集費	51,532
		第34号刊行費	1,128,347
		小計	1,179,879
		支出合計	2,107,651
		次年度繰越金	3,328,058
合 計	5,435,709	合 計	5,435,709

## 会員異動

### 【新入会員】

朝倉 登 名古屋学院大学経済経営研究科 M・ウェーバーの経済社会学  
(推薦) 小林甲一、村上寿来

山本 慎平 大阪市立大学経済学研究科 新渡戸稲造の社会思想  
(推薦) 小島秀信、鈴木純

### 【所属変更】

古松 丈周 旭川大学経済学部

小貫 浩 早稲田大学教育学研究科

【退会】 内藤能房、春日淳一

【逝去】 井口廣

経済社会学会年報 自由投稿論文 募集

〒390-8621 松本市旭 3-1-1 信州大学人文学部 水原研究室内  
経済社会学会年報編集委員会事務局宛

E-Mail [mizuhara@shinshu-u.ac.jp](mailto:mizuhara@shinshu-u.ac.jp)

TEL 080-5173-7269

---

## 経済社会学会 The Society of Economic Sociology

発行日：2014年2月22日

発行所：〒657-8501 神戸市灘区六甲台町2-1 神戸大学経済学研究科内経済社会学会本部事務局

電話/FAX：078-803-6808 (鈴木純) Eメール：[suzuj@econ.kobe-u.ac.jp](mailto:suzuj@econ.kobe-u.ac.jp)

HP：<http://www.waseda.jp/assoc-soes/index-j.html>

発行人：森田雅憲 編集人：大野正英・石田光規(東部) / 小林大造・豊山宗洋(西部)

印刷所：(株) 田中プリント 電話 075-343-0006